

子どもが自由にいきいきと遊べる社会をめざして

アタル！

ATARU!

三輪 英児

MIWA, Eiji

(特定非営利活動法人プレーパークせたがや)

1. プレーパークとプレーワーカー

NPO 法人プレーパークせたがやは、世田谷区を拠点として、4カ所のプレーパークの運営を中心に、子どもが自由にいきいきと遊べる社会をめざして、さまざまな活動を展開している団体です。

NPO 法人登録は 2005 年ですが、その前身である団体の設立は 1974 年まで遡ることができ、住民団体として長い歴史を持ちます。

ところで、皆さんはプレーパークをご存知でしょうか？

ひと言で言えば、禁止事項をなるべくなくし、子どもたちの「やりたい！」の実現を目指した遊び場です。日本では「冒険遊び場」という名前でも紹介されており、例えば、たき火や木登り、穴掘りや基地づくりなど、一般の公園ではなかなか見られない遊びが、プレーパークでは、日常的に繰り広げられています。

各プレーパークの運営は、地域住民のボランティアである「世話人」と、NPO 法人の職員である「プレーワーカー」がつくる「世話人会」で担います。中でも毎日プレーパークに常駐するプレーワーカーの存在は、日々の運営の要となるユニークな存在です。子どもたちからは、「毎日遊んでいられて、なんと羨ましい仕事だ！」と思われているプレーワーカーですが、その仕事は多岐に渡っています。

その筆頭は、場の空間づくり。プレーパークには、乳幼児や小学生を中心として、中高生や若者たちも遊びにきます。それらさまざまな年齢の子どもたちが、それぞれに「楽しい」「おもしろい！」「もっとこんな風に遊んでみたい」と思えるように、場には多彩な工夫が施されています。例えば滑り台やターザンロープなどの大型遊具。例えば登れたり、ロープをかけられたり、あるいは食べられる果実をつける樹木。例えば工作が自由にできるように配された、カナヅチやノコギリなどの工具であり、地面を自由に掘り起こせるシャベルだったり…。これらの要素を、どのように配置し、また子どもたちが安全に遊べるよう、導線にも気を配りゾーニングするのです。

もちろん、一つひとつの遊具をつくるのもプレーワーカーの仕事です。子ども達の冒険心をくすぐるような遊具を、地域住民たちと協力しながら、設計・作成。時には行動・言動で子どもたちの遊び心を刺激するなど、自らが遊具的存在にもなりながら、日々の開園

活動報告

を担っています。

常にケガの可能性があるプレーパークでは、その場に常駐する大人は、どうしても必要です。しかし一方で、子どもはいつの時代も大人の目の届かない場所で遊び、彼らだけの世界をつくってきました。そしてそれが子どもの育ちに大きく寄与してきた側面も見逃せません。

そのため、プレーワーカーは、自分が子どもの遊びの妨げにならないよう距離を考え、また一方では、大人として知恵や技術を教えたり、共に遊ぶ楽しさを共有するという、相反する課題を抱えながら、日々の現場に臨んでいます。

さらに、プレーワーカーは子どもの遊びを止めさせようとする大人に向き合い、子どもたちの「声にならない声」を代弁したり、あるいは子どもの遊びの大切さを地域や社会に広めていく役割も担っています。子どもが自由に遊べる為には、地域の大人の理解が必要です。また核家族化している現代の都会で、親や教師以外の大人と接する機会は子どもの成長にとっても貴重な機会です。

遊び場を中心に地域の大人たちを結びつけるなどの地域コーディネートも、運営者である地域住民と彼らプレーワーカーの大切な仕事なのです。

2. プレーパークの歴史

・冒険遊び場＝プレーパークの発祥

第二次世界大戦中の1943年。デンマーク首都コペンハーゲン郊外の住宅地に、奇妙な遊び場が生まれました。名前は「エンドラップ廃材遊び場」。遊び道具は、のこぎり・かなづち・スコップなどの工具、そして山のような廃材。デンマークの造園家、ソーレンセン教授が「子どもは、大人が整備した公園よりも、『ここでは危ないから遊んではいけない』という廃材置き場や工事現場などの方が、はるかに生き生きと遊ぶ」という事実に気付いた事から生まれた遊び場です。

このエンドラップ廃材遊び場が、冒険遊び場＝プレーパークの原点と言われています。

この取り組みに共感したイギリスの造園家、アレン卿夫人が熱心にこの必要性を訴え、1948年にロンドンで初めての冒険遊び場が誕生します。そして「プランニング・フォー・プレイ」という本にまとめて紹介した事で、ヨーロッパに広がりました。

・日本での誕生と発展

日本におけるプレーパークは、1970年代に、ここ世田谷から始まりました。当時、経堂に居を構えていた、都市計画を専門とする建築家の夫と英語教師の妻が、我が子の遊び方が、自分たちの頃とあまりにも違うことに危機感を持ちました。「子どもの遊ぶ環境がおかしくなっているのでは？」と外遊び環境を調べだした二人はやがて、書籍「プランニング・フォー・プレイ」と冒険遊び場にたどり着きます。そしてこのアレン卿夫人の著書を翻訳

して「都市の遊び場」というタイトルで出版して冒険遊び場を日本に紹介したのです。

さらに夫妻は現地に赴き、欧州のさまざまなプレーパークを視察します。帰国した二人は、彼の地で撮りためた写真をスライドにし、近所の人たちや、近隣小学校・幼稚園のPTAなどで上映会を行い、仲間を募りました。この時生まれたのが、私たちの前身である「遊ぼう会」です。

そして1975年。遊ぼう会のメンバーは、世田谷区経堂の緑道設置予定地に、夏休み限定で「経堂子ども天国」を開きました。これは日本で初めての冒険遊び場といわれています。翌1976年の夏休みも同じ場所で開園した後、場所を変えて、今度は15ヶ月間にわたり「桜丘冒険遊び場」を開園しました。

これとほぼ同時期に児童公園の研究者でもある世田谷区公園課の職員が、公園での遊びの衰退を危惧していたところに、夫妻が翻訳した「都市の遊び場」に出会います。この官民の二者が協力し、1979年の国際児童年の記念事業として、羽根木公園の一角に1年間の予定で「羽根木プレーパーク」が開かれます。

翌1980年には、このプレーパークが世田谷区の継続的事業として認められ、行政が住民に事業運営を委託し協働するという先進的な取り組みが始まりました。

具体的には、区が土地を用意し、運営の為の資金提供もして、社会福祉法人を通して地域住民達に事業委託をしました。地域住民達は発生する問題を区と協議・解決しながら、足りない資金も自ら用意して運営にあたりました。

その後、これと同じ協働方式で、1982年に世田谷プレーパーク。1989年に駒沢はらっぱプレーパーク。そして2003年に烏山プレーパークが開園。2005年には、これら4プレーパークの住民ボランティアたちが中心となって、NPO法人プレーパークせたがやを設立。区からの運営委託を受けるというかたちで、現在も住民主体のプレーパーク運営を続けています。

*全国的な広がりの中で

世田谷区で生まれた、日本のプレーパーク活動は、その揺籃期から報道で取り上げられることも多く、全国に追随する市民団体・行政などが現れました。子どもの遊び環境の危機は、もちろん世田谷区だけの問題ではなく、全国で考えるべき問題であることから、私たちはその動きを大歓迎し、出来る限りのサポートをし続けてきました。

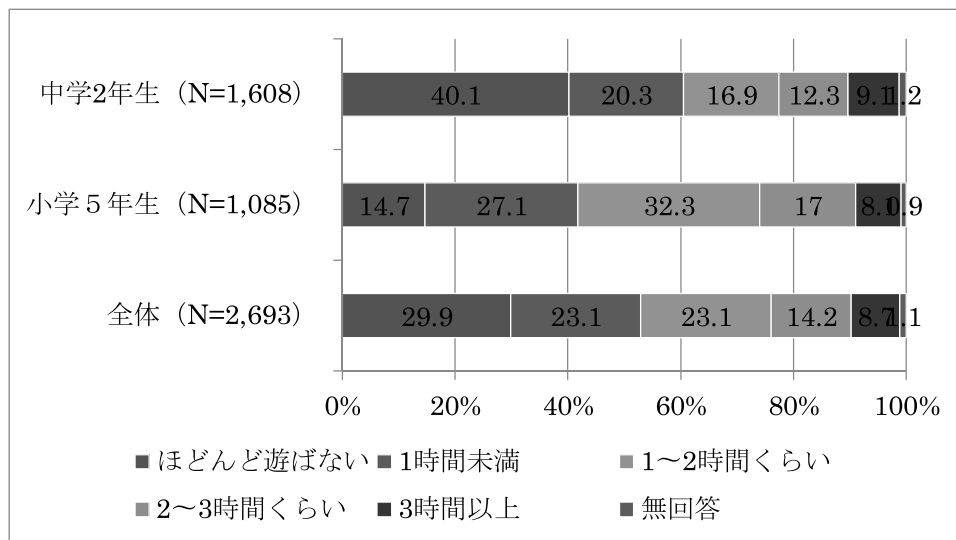
1998年、羽根木プレーパーク20周年を記念して、「第一回冒険遊び場全国研究集会」を開催。これをきっかけにプレーパークづくりを支援する全国的な組織結成の機運が高まり、翌1999年「冒険遊び場情報室」を設立。現在の「NPO法人日本冒険遊び場づくり協会」につながっています。ちなみに2013年の調査で、プレーパークを運営する団体の数は400団体を超えていることが確認されています。

3. 子どもの遊びを取り巻く環境

私たちは「子どもが自由にいきいきと遊べる社会をめざして」活動を続けていますが、現在、子どもたちの遊びを取り巻く環境は、悪化の一途をたどっています。しかしながら、そのことはなかなか世間に認知されていないのが現実です。いまだに多くの大人は「子どもなんて、放っておけば、いくらでも遊ぶだろう」と考えています。

確かに、現代でも子どもたちは、「放っておけば」いくらでも遊びます。問題は、今の大人や社会が子どもたちを「放っておいてくれない」ことです。

図表1 学校から帰宅後の遊ぶ時間

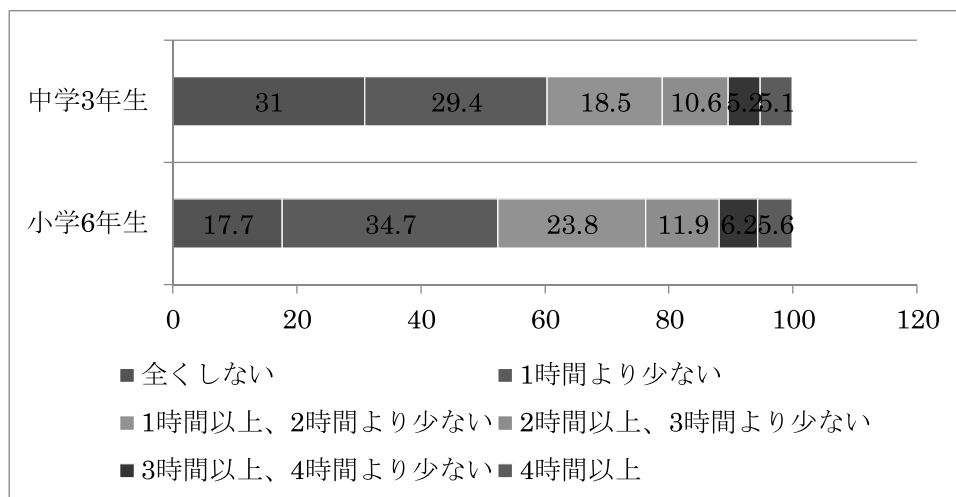


出典：平成19年6月・7月 川村学園女子大学子ども研究会

「子どもたちの日常関係や親子関係、各種体験などに関する調査」

「帰宅後の子どもたちの遊ぶ時間」という中学2年生と小学5年生を対象とした、平成19年の調査では、「ほとんど遊ばない」と答えた子が、全体の約3割。1時間未満しか遊ばない子を合わせると、なんと半数を超えることが分かりました。しかもこの数字は、ゲームなどの室内遊びも含むものです。

図表2 平日（月～金曜日）1日あたり、何時間、テレビゲームやインターネットをするか



出典：文部科学省「平成20年度全国学力・学習状況調査」

平成20年度の調査で、小学6年生の5割弱、中学3年生の約4割が、1時間以上テレビゲームやインターネットをしていると答えています。図表1のデータと重ね合わせると、いかに子どもたちが屋外で遊ぶ時間が減っているか了解いただけると思います。

例に挙げたデータは、小学校高学年以上の子どもが対象となっていますが、屋外で子どもが遊ぶ時間・機会の減少は、乳幼児から中高生まで、共通の問題となっています。

「子どもが外で遊ばない・遊べない」という現象の原因は多岐に渡っており、しかもそれぞれが複合していると考えられています。ゲームやインターネットの影響はもちろんあります。しかし、私たちは子どもたちの「公園がつまらないから、ゲームぐらいしかやることない」「外で遊んでたら、怒られたから、家で遊ぶしかない」という声も直接聞いています。最近、テレビのワイドショーなどで良く取り上げられるようになりましたが、いま公園は禁止事項の看板だけで、子どもたちにとって、ちっとも楽しい場所ではなくなっています。また、道ばたや空き地、神社の境内、裏山やため池、そして「なんだか良く分からないけどちょっと遊べそうなスキマ」など、昔の子どもたちが大好きだった遊び場は、大人の監視の目が、良くも悪くも行き届くようになって、子どもたちを追い出してしまいました。

今例に挙げたのは「空間がない」という話ですが、その他「塾や習い事で忙しくて遊べない」という「時間がない」訴えも耳にしますし、「一緒に遊べる友達がない」という「仲間の不足」を嘆く声も届きます（空間・時間・仲間を称して「三間（サンマ）」の欠如とも言われています）。

早期教育の名の下、塾や習い事は、どんどん低年齢化していっています。また、仲間の不足という点では、非常に大きな要因として、少子化があります。近所に子どもが少なく、一緒に遊べる友達が少ないという、直接的な影響もあれば、社会から子どもが減ったため、

活動報告

「子どもは、そもそも人に迷惑をかけながら大きくなるものだ」という社会的了解が薄れ、「子どもの声がうるさい」という苦情が増えた。その結果として公園や校庭・園庭でさえも、子どもが大声を出したり、自由にのびのび遊ぶことができなくなっている、という現象もあります。それは、違う側面から見れば、地域社会が崩壊して、「近所の子どもの顔も分からない」から苦情が増えたという別の説明もできます。

いずれにせよ、いま日本の子どもたちの遊び環境は、壊滅的な状況に追い込まれていると私たちは感じています。

4. 多角化する活動

・プレーカー、プレーリヤカーの運行

子どもの遊びを取り巻く環境の危機的状況を受けて、私たちも活動の幅を大きく広げています。

私たちは、そもそもプレーパークの運営に端を発した法人であるため、これまでは「いかに多くの子どもたちをプレーパークに呼び込むか」または、「区内にいかにかプレーパークを増やすか」という視点で活動していましたが、それでは到底追いつかない現実が見えてきました。区の財政的な問題もあり、新しいプレーパークの開園も2003年の烏山プレーパーク以来途絶えていました。

そこで、2008年より、区内のプレーパークがない地域に、「遊び場を出前する」という発想の「プレーカー」を運行することにしました。当初「次太夫堀公園 東側児童遊園」「玉川野毛町公園」の2カ所に月一度ずつ運行していましたが、2014年度より「二子玉川公園」への運行もスタート。また、2015年度からは、区の「自然体験遊び場事業」として位置づけられるなど、より安定的・継続的な運行ができるようになりました。

また駒沢はらっぱプレーパークでは、平日の午前中の時間、近隣の小さな公園に、リヤカーで遊び道具を持って行く、より小規模な「プレーリヤカー」活動も行っています。こちらは、主に乳幼児親子を対象とした活動ですが、活動者も順調に増え、2016年度からは法人外の別組織として独立するなど、活動の枠を広げています。

・園内に「おでかけひろば」を併設

乳幼児期より日常的にたっぷり外遊びをすることは、子どもの成長にとって欠かせない過程であると私たちは考えています。しかし、現実には乳幼児を持つ保護者の多くにその意識は薄く、また必要性を感じていても、さまざまな理由からなかなか外に足が向かない人もたくさんいます。

そこで、2011年より羽根木プレーパークの園内に、子育て支援拠点である屋外型の¹⁾おでかけひろばとして「そらまめハウス」を併設しました。洗練された都市生活を送ってきた保護者たちにとって、いきなり土まみれ泥まみれで遊ぶプレーパークに飛び込むのでは

なく、半屋内・半屋外のそらまめハウスがあることで、緩衝材のような効果が生まれ、多くの乳幼児親子のプレーパークデビューのきっかけをつくっています。

* 世田谷区における子育て拠点支援事業

・ 若者支援事業（夕食会）

プレーパークには、中高生や、それよりも年上の若者たちも来園します。思春期特有の不安定さを抱えた彼らの中には、学校や社会に（場合によっては家庭にも）なかなか自分の居場所が見いだせず、また社会の方でも彼らに寄り添った居場所を提供できていないという問題があります。

各プレーパークでは以前より、閉園時間後でも若者たちが訪れた時には、プレーワーカーたちが彼らと膝を突き合わせ、時に悩みを聞いたり、時に他愛ない話に興じるなどしてきました。そんな話の中で、彼らのうちの少なからぬ子が一人で夕食を、それもコンビニの弁当やカップラーメンなどを摂っている「弧食」の問題が見えてきました。また、世田谷区では比較的数が少ないとは言え、貧困の境遇におかれている子どもたちの姿も見えてきました。プレーパークせたがやでは、毎週金曜日の閉園後に夕食会を開いている烏山プレーパークをはじめ、各プレーパークで同様の取り組みを行っています。

また、思春期の子どもを持つ保護者同士が、悩みを語り合えるセルフケアグループワークの会なども開いています。

・ キャンプ事業

プレーパークは確かに、都市の中で子どもが身近な自然に触れながら、のびのび遊べる機会をつくり出しています。しかし、多くの子どもたちは、塾や習い事などで時間が細切れにされていて、長い時間をかけてじっくり遊び込む体験はなかなかできないのが現状です。また、プレーパークの狭い敷地では、自然の豊かさを本当に感じることは到底できません。このような背景から、プレーパークせたがやでは以前から、夏休みの期間を利用して、希望する子どもたちとプレーワーカーとで、1週間程度のキャンプに出かけています。

このキャンプの特長は、あらかじめ用意したプログラムがほとんどないこと。食事や就寝時間も決まっていませんし、そもそも大人のスタッフが子どもたちに食事を用意することもありません。子どもたちは食べたい時に、自分たちでごはんをつくるしかなく（食材は並べてあります）、眠る時間起きる時間も自分で決めます。プレーワーカーを中心としたスタッフは、彼らが主体的に動くのをサポートしたり、ケアする動きをするだけです。

ただし、このプリミティブなキャンプを行うためには、周到な準備が必要です。プレーワーカーたちは、この1週間のキャンプのために、9カ月も10カ月も前から準備を始めることも珍しくありません。

5. おわりに

現在、世田谷区内4箇所プレーパークへの年間来園者数は、25万人以上に上ります。それに加えて、区内には私たちのプレーパーク以外にも外遊びを触発する拠点があります。

多摩川の河川敷にある、水辺の特性を生かした遊び場「きぬたま遊び村」、乳幼児が外遊びをたっぷり楽しめる「のざわテットーひろば」や、乳幼児親子の外遊びの為に公園などに出張する、プレーリヤカー活動も盛んです。

これら区内のさまざまな遊び関連の団体と共に、子どもの遊び環境の改善を地道に訴え続けてきた結果、2016年度からスタートした世田谷区の第二次子ども計画の重点政策「子どもの生きる力の育み」の中には、「すべての子ども達が身近な場所でいきいきと外遊びができる環境を拡充し、外遊び体験を推奨する」と明記され、新たな拠点の整備や充実策が準備され始めました。

もっとも大きな課題とされているのは、子どもの外遊びに対する大人の意識を変えることです。その為にさまざまな方法でメッセージを発信し、外遊びの大切さが広く理解されるように全区的プロジェクトをつくり、活動を連携して進め相乗効果を狙います。

具体的には、学校や保育園、幼稚園などの子ども関連施設、町会などの住民組織や商店街振興組合など民間団体の協力を得ながら、子ども関連のNPOなどや児童館、公園、青少年委員会などの行政関連機関が連携して、大人の意識変革と不足している遊び場の充実を働きかけます。例えば、

- ① プレーパーク、プレーリヤカー、水辺の遊び場（きぬたま遊び村）等の、今ある多様な活動をますます充実させる。
- ② イベントやキャンペーン等、新たな企画を通して外遊びの大切さを伝えていく。
- ③ 学校での毎日の活動や街中の路地や身近な公園など、日常的な場での外遊びのきっかけを大切にしていく事、などが挙げられています。

今後の計画として、現在プレーパークのない砦地域にも拠点を新設し、区内5地区の外遊びの拠点を整備・充実することで、新たな外遊び活動の発信を目指します。

[注]

¹⁾ おでかけひろば：主に乳幼児の子どもと保護者（妊娠期含む）が利用でき、交流や子育ての相談ができる、世田谷区の地域子育て支援拠点事業のひとつ。条件を満たした事業者に補助金が拠出されるが、その条件に「園庭」や「近隣の公園」などの項目はなく、多くのおでかけひろばでは、乳幼児の外遊びの促進は実現されていない。